九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「超高速ネットワークを利用したアジア遠隔医療プロジェクト」TEMDEC (Telemedicine Development Center of Asia)活動報告 : 第14巻

https://doi.org/10.15017/4403553

出版情報：「超高速ネットワークを利用したアジア遠隔医療プロジェクト」 TEMDEC活動報告. 14, 2018-03. TENDEC Office
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

14. あとがき

遠隔医療のその先、「遠隔介護」

世界的に高齢化が進行している。特に日本は高齢社会の世界のトップランナーだ。医学医療が発展すると、その結果として高齢者がさらに増加するので、同時に介護についても充分に考えておかなければならない。このことは、遠隔医療においても同様であろう。つまり、遠隔医療を発展させるのであれば、遠隔介護の可能性も模索しておくべきである。さて、それでははたして遠隔「介護」は可能なのであろうか？

介護とは、身体機能や認知機能の低下した高齢者を見守り、世話をし、意思疎通し、癒すことにより、日常をより良いものとし、幸福にさせるものである。介護手法が発展することによって残りの人生はより充実するし、効率化することにより、家族の負担を軽減し、家族の労働生産性を保つことができ、ともに過ごす時間を増やすこともできる。また介護費用が軽減されると、より多くの高齢者が適正な介護を受けることができることになる。

上に書いた介護の定義の「見守り、世話をし、意思疎通し、癒す」のうち、「世話をすること」、つまり遠隔操作で、例えば高齢者を運んだり、食事をさせたり、お風呂に入れたりすることは、介護ロボットが無ければできない。介護ロボット自体は、現在様々に研究されており、介護者が現場で操作するロボットは近く使われ始めるだろうが、遠隔で安全に操作できる介護ロボットの実用化はもう少し先の話になりそうだ。

その一方、遠隔地から

・見守る（本人の目、耳、鼻、皮膚の代役となる）

・意思疎通する（会話をする、時間や危険などを知らせる、社会参画させる）

・癒す（視覚、聴覚で楽しませる、ペットロボットで癒す）

などに関しては、現在既に存在する技術の応用でも充分に可能である。特に「見守り」については、センサーネットワークを駆使して、IoT 技術により情報を取得し、解析することによって介護サービスをさらに良いものとすることも可能であろう。

今後、遠隔医療と平行して遠隔介護についての活動も積極的に進めて国境を越えて皆で技術や知識を共有し、さらに良いものを作ってはどうか。介護に目を瞑り、遠隔医療のみを発展させて迷える高齢者を増やすのは片手落ちだろう。そして、いずれ私もあなた（読者）も介護を受ける側になる可能性が高いのである。

平成 30 年 3 月

九州大学病院 国際医療部 副部長